

槐かい

岡井省二創刊

平成29年7月号



平成二十九年七月一日発行 第二十七巻第七号 誌名第三二二号 毎月一回 日発行
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

盲 点

高橋将夫

接木終へはや一木となつてゐし
梅の木に接木をされて桃笑ふ
上り築音を集めてをりにけり
ボンジュールムツシユーと言へばリラの花

フランスの田螺は鳴かぬと言はれけり

末黒野に火の鳥の羽おちてをり

あたたかな音のでんでん太鼓かな

那智黒や吉野熊野は花曇

花筏先後ときをり入れ替はる

追つてゐる方はどちらのつばくらめ

盲点は真下にあるぬ揚雲雀



槐安集

水野恒彦

虚子の忌の日当る山と翳る山
たんぽぽの絮海境を越えゆけり
瑞牆^{みずが}山^{まき}を蔽うつもりや雪涅槃
流寓のみじかき蜷の道なりき
天空に木霊さまよふ嶺桜

加藤みき

八十八夜すでに苦潮治まりて
葉櫻やはじめをはりはサイレンにて
牛乳を嘔み嘔み飲むや朧月
縁蔭に眠狂四郎立つてをり
柿若葉海^{わたなか}中に見る日のひかり

中島陽華

弥生三月桐の柱目の下駄履いて
洩かんで那の津流れの朧月
ひきがへる四五匹ほどのドンゴロス
乙女の祈り流れて春の茶白山
かはたれの産みの社の春の月

竹内悦子

家元の束ねし山の櫻かな
縞馬のわんわんと啼く四月馬鹿
真四角に坐るオランウータン春の昼
釣釜や宝づくしの茶碗にて
春の夜のヨイトマケ聴く一人かな



雨村敏子

リクエストは五目鮭花いちもんめ
花の山団子の串もにんげんも
養花天圓座の端にまる虫も
常の日のゆつくり過ぎる白木蓮
山葵田に夜の水音の大きかり

本多俊子

晩節の道いま満開の花の下
春の星太古も女耳飾る
歩まねば今が無くなる春の草
海鳴りの遠く田螺の鳴きにけり
ひそやかに槓の花咲く空のあり

近藤喜子

仮の世の逃水なれば夢幻なり
あはあはと春の虹すぐ過去となる
宇宙ひろがる水芭蕉一花より
石鹼玉の中にありたる青山河
山藤の奥もう泣かぬ死者ばかり

瀬川公馨

花のいのち花咲翁の灰の中
春の日や笑ひ浄土に招かるる
モロツカンオイル引くやに鳴の水脈
畑打ちや教育勅語に御用心
アリババと四十人の盗賊春

久保東海司

嘴あげて鶴いつせいに声揃へ
寒椿墨濃淡の山水画
せがまれて兜を折りし端午かな
雨粒の光る芽吹きの枝垂梅
川べりの桜こまごま光りつつ

柳川 晋

花として蕾はくいと首を上ぐ
毒を吸ひ光へ返す櫻かな
養花天ノアの箱船めく日本
今ここが般若波羅蜜山笑ふ
百匹目の猿も来てゐる花宴

熊川暁子

春灯や文読めば字にこゑがする
海市ありこの美しき星にゐて
あひまひに教へられたる春の道
手のひらに昔がありぬ草の餅
むすんでもひらいても春幼の手

寺田すず江

異次元を引き寄せてゐる桜かな
蹠あなうらをくすぐる江みぎは灌仏会
春昼や砂丘に泛ぶ白い月
蛙鳴く裏も表もなかりけり
地球儀の重くなりたる桜騒

岩下芳子

野焼の火果てて鎮めの雨となる
山河いま四月の雨に膨らみぬ
存分に五指を広げし若楓
大川のまん中にゐて花の酔ひ
櫻貝に混じる色貝千種貝

近藤紀子

橋わたり合格子来るよき日なり
粗榥の末より囀降りかかる
花吹雪をうけし五体や池めぐる
子育てのすみしか浮巢流れゆく
人麻呂も聞きし葉擦れや竹の秋

岩月優美子

囀りの零るる水面煌めきぬ
春虹やしばし無心の刻なりし
蜃気楼いま消えなんとして不安
岬へと続くこの道茅花かな
桜蔭降るパイヤは食べ頃に

竹中一花

野遊びの筵飛び出す佐渡おけさ
午の背に積みし五穀や春祭
壬生狂言がんでんと樟咲ふ
萌えいづる野に神々の通り道
釣釜や伏見の水のふつつつと

前田美恵子

羽衣の掛かりて緑立ちにけり
棧橋に小舟の残る遅日かな
盛土のそこだけ赤き菫の花
櫻朶ふる降る彼の世にもあらむ
太平の世に住み螢袋かな

中田禎子

花びらも積荷のひとつ出航す
石室にこゑあり櫻吹雪かな
放ちても満つるもの無し牛蛙
白牡丹ポーの黒猫横たはる
白雲喰ひつくす千の鯉幟



槐市集

後藤マツエ

海上に仏陀めく雲懐手
蝶とびて畑に命溢れ出す
芽吹き山命の賛歌奏でをり
牡丹咲く蕊より金の虫立てり
鞦韆やだれもいぬのに揺れてをり

阪倉孝子

天地の音を消したる花吹雪
花菂シヤンパンの泡・叛乱す
風神のまどろみてをり花の雲
花衣やさしき影を連れかへる
鬼門より浮かれ出る影花筆

篠原京子

白球を追う若人や夏の雲
朝顔の空をつかむかつるの花
蛸飯で締め括りたる帰省かな
梔子のかをり纏うていたりけり
たおやかにででむし角を伸ばしけり

柴田靖子

春の声あまたにありて誘ひくる
春の海いとねむたげな顔をみせ
寄せ付けぬ力満ちたり牡丹の芽
山茱萸の黄色い雨を降らしをり
時止まることなど無しと紋白蝶



庄司久美子

竹林を巡らす柵や百千鳥
観音寺の岩につぎつぎ青蜥蜴
たんぽぽや岩はぽつかり割れてゐる
薔薇園や天使ラッパを口にあて
門前のガジュマルに触れ鳥巢立つ

杉原ツタ子

南無大師妣の背も見之春の磯
その先は古戦場とや山櫻
春おぼろ旦の靄もしずしずと
木の洞を覗いてゐたる花見かな
時折や海鼠壁また紫木蓮

高野昌代

醍醐寺の切手に遺せし桜かな
湮繫西風終日仁王の面構へ
一枚の春を探しに將軍塚
淀君の忘れがたみか城跡桜
喜びの感謝の叫び復活祭

竹村 淳

春雷や眠る生駒を揺り起こし
春選抜二校で飾れぬ優勝旗
春に咲く貝母の花は季語に無し
春牛^{八尾牛券}蒔市の振興を背負はされ
鳩の海比良八講が荒れ終ひ

田中信行

川岸に農夫と妻と春の夕
悠然と羚羊の歩や里の春
冷戦の戦中戦後春惜しむ
ミューシャの絵プラハの春を思ひけり
ポケットに俳句手帖と桜薬

田中美恵子

青嵐未知のきざはし登りける
ローカル線のみんな友達山笑ふ
蜆汁帰るとこあるしあわせよ
微笑みの横顔まるし花衣
おぼろ夜の弁柄格子に鈴が鳴る

槐集

高橋将夫選

穴を出てまづまつすぐに伸びる蛇
大阪 有松 洋子

まあいいかまあいいよ朧月ふんはり
宇宙までとろけさうけふの春空

羽つよき燕仏陀の掌の外へ
一病の増えて囁いとほしむ

ものの芽の頃もののが動き出す
大阪 江島 照美

八重桜美しき重さを競ひけり
黄水仙姉より妹の輝きて

見えねども分かりし心春の月
梅園は人も寡黙になりにけり

金泥の一巻を展べ春の海
大阪 平野 多聞

あらたかに坐す春眠の飛鳥仏
男来て桜散らしの雨となり

任せよの声天にあり鳥帰る
初夏を三つ折にして投函す

春霞記憶の壺のふたを閉づ
大阪 藤田美耶子

フェルメールの少女の瞳春惑ふ
物語一つつむいで春の蝶

捨ててきし家ふりむかぬがうなかな
春の宵源氏の君とすれ違ふ

けふの雲西へ西へと種袋
岡崎 犬塚李里子

竹藪の揺れしづまらぬ涅槃変
遠嶺より神降りて来る花菜畑

春暁や太白地球窺へり
未来図にぼんやりと浮く朧月

新樹光身のすみずみに血のめぐり
岡崎 吉田 順子

ちちははの深き眠りへ花万朶
たましひの揺れは映さず花いかだ

謎いまだ明さぬ古墳沙羅の花
かたつむり殻を出でむと伸びきりぬ

銀河往來 高橋将夫

◆槐集観照

まあいいかまあいいよ 朧月ふんはり 有松 洋子
「まあいいか、まあいいよ」、なんともアバウトな感じである。そんな時でもなければ、窮屈な人生になる。ふんわりと浮かぶ朧月がその観念の具象化なのだ。この作者ならではの一句で、新境地。

〈穴を出てまづまづすぐに伸びる蛇〉の句は、とぐろを巻いた窮屈な冬眠から解放された蛇の心境がリアルに具象化されている。精神の風景。

〈宇宙までとろけさうけふの春空〉の「宇宙までとろけさう」の大胆な描写には脱帽。

ものの芽の頃もののがけが動き出す 江島 照美
草木が芽吹く木の芽時には、もののがけまでが動き出すという。なるほどあらゆるものが躍動を開始するのだ。「ものの芽」も「ものけ」のリフレインが効いている。

〈八重桜美しき重さを競ひけり〉の句、一重の櫻に対し、八重桜はなんとなく重たげである。そんな感じが直に伝わってくる。

任せよの声 天にあり鳥 帰る 平野 多聞
「まかせよ」の天の声が力強い。鳥も安心して雲に入れそう。

天の声を聴いた作者なら、何でも任せられそうである。
〈金泥の一卷を展べ春の海〉句の「金泥の一卷」へあらたかに坐す春眠の飛鳥仏の句の「春眠の飛鳥仏」などを見て、これから「仏の多聞」と呼ぼうかと思っている。
〈初夏を三つ折にして投函す〉の「初夏を三つ折」の表現は巧み。

春霞 記憶の壺のふたを閉づ 藤田美耶子
記憶が春霞のように雲散霧消してしまいそうな気がして、あわてて記憶の壺の蓋をした様子。たしかに、記憶は頭蓋（とうがい）の壺に保管されている。この作者開眼の一句に思える。
〈フエルメールの少女の瞳春惑ふ〉と〈物語一つつむいで春の蝶〉は詩的ではのぼのとした物語を感じさせる。〈捨ててきし家ぶりむかぬがうなかな〉は核心を突いている。俳諧。

遠嶺より 神降りて来る 花菜畑 犬塚李里子
遠嶺をバックに配した花菜畑の大景。遠嶺から神が降りてくるといふ。自然と神が描かれた絵画を見るようだ。
〈未来図にぼんやりと浮く朧月〉の句、地球の未来、宇宙の未来はどうやら平和のようだ。

かたつむり殻を出てむと伸びきりぬ 吉田 順子
蝸牛が殻を出し、頭を出して動き出す様子がリアルに表現されている。本当に殻を出たがっているのかもしれない。
〈たましひの揺れは映さず花いかだ〉はまさに魂に響く一句。

〈以下略〉